

子どもの学習環境の現実の姿をご存知ですか？

5回シリーズ 最終回

教育委員会では、町内の学齢期の子どもたちの実態を明らかにし、家庭・学校・地域がそれぞれの立場から、子どもの健全育成のために何をすべきかを考えるために、平成17年5月、町内の小学校3〜6年生の児童459人、中学校1〜3年生の生徒349人を対象に「学習環境実態調査」を行いました。子どもの学習環境の姿を知っていただき、子どもの健やかな成長についてみんなで考え、みんなで育てる校区コミュニティづくり役に役立てていただくことを心より期待いたしております。



質問⑮ あなたが、先生や学校にお願いしたいことがあれば、遠慮なく書いてください。

コメント

小学生は、休み時間を増やす（長くする）ことと、宿題を減らすことを求める声が多く聞かれます。特に中学年では、「一緒に遊んで」「校庭に芝生がほしい」「分かりやすく教えて」など、高学年では「友達に注意してください」「厳しく優しい先生に」「分からない所を教えて」などが目につきます。

中学生は、「勉強を分かりやすく教えて」「楽しい授業にして」「校則を緩くして」「教室には）タバコの臭いを消して来て」など、どの生徒にも分かる楽しいきめ細かな授業と健康被害への配慮を求める声が多く聞かれます。

昨年11月から4回にわたって、「子どもの現実」について連載してきましたが、このシリーズも今回で最終回です。そこで、これまでに町民のみなさんからいただいたご意見・ご感想をいくつか紹介させていただきます。
本欄のコメント以上に貴重な体験を、ご家庭の子育てにも生かしてください。

うちの子 よその子

みんなで考え みんなで育てよう

子どもの現実「学習環境実態調査」から

朝ごはんを食べさせて

5年生の祖父 65歳

発育盛りの5年生の子どもの1割が「ほとんど朝ごはんを食べていない」という調査結果を読んで驚くと同時に情けなく思います。腹が減っては戦はできません。朝食は一日の健康を支える大事なエネルギーです。親が子どもに正しい三度の食事の習慣をつけてやるのは当然のことと思います。

勉強も大切ですが、健康が第一です。共働きで得たお金で、塾に行かせたり、欲しい物を買って与えたりするのも良いでしょうが、成長盛りの子どもにはぜひとも朝ごはんが必要で、給食は午後からのエネルギーです。午前中の勉強には間に合いません。お母さん方も忙しいでしょうが、朝食を食べさせて学校へ行か

せていただくようお願いいたします。
(事務局より参考)
福岡県内の小学5年生の学力実態調査では、「朝食を毎日食べる子」は「食べない子」より国語の平均点で13%、算数で16%も上回り、朝食を摂ることが学力向上に大きく作用していることが明らかになっています。

忙しいと心は平穏でも

子育て中の母 45歳

「生きる力」という言葉を耳にしたから随分長くなりますが、最初はとらえどころのない、現実味のない

言葉と感じておりました。勉強でもスポーツでも自分で考え、納得して行動に移さなければ、その

成果は現れません。最近になって「自分で考え行動すること」が「生きる力」ではないかと考えるようになり

ました。社会の変化に伴い、フルタイムで働く母親が増え、時間に追われて生活する家庭が増えました。将来への不安をもつ親は、子どもを塾や習い事に通わせ、子どもも忙しい毎日を送っています。

「忙しい」という字は「心を亡くす」と書きます。目先のことにとらわれて心を亡くし（心を忘れ）、大切なものを見失っているのが今のこの国の姿のように思います。親は忙しいからこそ子どもとしっかり向き合い、語り合うことで「生

きる力」を育む努力をしなくてはならないと思います。「生きる力」を養い、心豊かな家庭を築く第一歩は、幼児期の添い寝をしながらの本の読み聞かせではないかと、三人の子育てが終盤に近づいた母親として感じております。

「つけ」はわが身に

男性町民 70歳

調査結果を見るにつけ、気になる子どもが多いことに驚く。次の時代を担う子どもたちがともに成長するかどうかは大人（親）の責任である。

バラエティ番組があり、（それを全て否定はしないが）一方では、子どもたちの知的な成長を促す番組や情報豊富な番組がたくさんある。番組選択にも親の強い指導力があるのではないだろうか。

親の都合で一貫性のない子育てをしていると、そのつけはやがてやってくる。テレビは連日お笑い番組や

今回のアンケート機会に、家庭環境を見直し、生かすところは継続

うちの子

主婦 53歳

我が家では子どもたちが小さいころ、ファミコンがブームで「友達はみんな持っている。ないのはうちだけ」と言っていたのがありました。

子どもたちが画面に釘付けになり、ゲームに熱中している姿に何か不気味なものを感じていた私は、「よそはよそ。目が悪くなるのうちは買わない」「おかあさんはケチ」と母子でバトルを繰り返したことを思い

だします。そのうちにいくら言ってもムダと諦めたようで、欲しがらなくなりました。その代わりにと、子どもたちが夢中になっていた釣りにはよく連れて行きました。真夏のガラガラした陽射し、川面を渡る初秋の風、潮の香、魚がかかったときのワクワクした気持ち、親で体感できたことはバー

チャルな世界でゲームを攻略することよりもはるかに良かったと今ではハッキリ言えます。

ここ数年、携帯電話も加わり、さらに大きくなったこのメディアの洪水の中から、子どもたちを守っていく責任をひしひしと感じます。「ノーテレビ・デー」を全町的に展開してはどうでしょう。